

発行日 昭和 56 年 3 月 15 日 (毎月 15 日発行) 通巻第 4 号

Trial & Error

試 行 錯 誤



特集 オーストラリアの避難民



VOL.4

特集

オーストラリアの避難民
(Refugees in Australia)

フリーランス・ライター

松本和子

オーストラリアといえば最近のインドシナ難民の救援には非常な力を発揮してきたことで、内外問わず知られている。

日本のUNHCRの援助計画に対する拠出金総額は、(1980年6月末現在)約6,500万ドルで米国の9,200万ドル、ECの6,650万ドルに次ぐ世界第3位。因に、オーストラリアは882万ドルで、1,530万ドルの英国に次いで世界第5位。

さらに日本はこれに加えて、医療チームの派遣、医療センター建設に供なう医療協力、食糧援助、水資源開発など合せて約9,000万ドルの援助を行なった。そして1980年度には合計1億ドルの援助を行っている。(外務省情報文化局“日本とASEAN”より)

これらを取り上げれば、日本は決して難民問題に対して不熱心な取り組みをしているとは言えない。が、事、難民の受け入れとなると様相は異なる。

この1月オーストラリア政府は、81年度(81年7月~82年6月末日まで)の移民受け入れ総数を10万9,000人、うちインドシナ難民2万人と発表した。

そして日本では、1980年6月にそれまで厳しかった定住条件を緩和し、枠を1,000人に拡大した。その結果1980年11月現在(辞退者を除く)789人が定住許可され、466人がすでに日本での生活に入っている。

○ 受け入れの背景

オーストラリアは、人口比からすると世界で最もその割合が高い国となる。この高い数値を生む背景として、①ベトナム戦争参戦国としてのモラル・オブリゲーション(前駐日大使ジョン・メナデュエ移民・民族省次官発言)もしくは、モラル・レスボンシビリティ(道義的責任)を感じていること。②移民立国であることがあげられる。

しかし実はそれにしても、現在オーストラリアの経済面での急務である技術者の移民や、先に定住している移民(欧米、オセアニア、アジア等世界中からの)の家族の呼びよせが難民の枠に圧れ、二の次になりその不満の高まりを政府はコントロールしなければならない現状である。

ともかく、やはりこの数の差は、あまりにも開きがありすぎるように思われる。さらに日本では定住難民は移民と認められ職につくようになってさえ、なかなか日本国籍が与えられないのに対しオーストラリアでは、定住が認められたらすぐに国籍が取れる。難民センター所長のビアドセルさんは、“移民とは、この国の国民になる事なのだから国籍を取らないなんて考えられない”と、国籍の取得がむしろ義務であるかのような口調で語った。ともかく、難民に対する諸々の決定にはその国の現在の状況も重要な要因にはなるのだが、まずなによりその国のたどって来た歴史が大きく反映される。だから日本の様に全体的に難民に対する経験、認識とも希薄な国で、活動される人々は新しくこの国に歴史を創っているのだと考える。



○ 難民受け入れセンターについて

難民はポート・ピープルを除けば、マレーシアのクアラルンプールとタイのバンコクに派遣されている難民担当官9名と、各地の移民担当官によって選択される。

< 選択基準 >

- ① オーストラリアでの直系親族の有無
- ② 手に職があるか否か
- ③ 英語能力

等。それに加え嚴重な健康診断が行なわれ、同時に治療も受けられる様になっている。短期間のオリエンテーション・コースを受けた後、オーストラリアへ渡り、到着後すぐに全オーストラリアにある14カ所の移民センターへ収容される。

< 難民センター所長
ピアドセル氏へのインタビュー >

— East-Hills 難民センター（シドニー効外）

このセンターは他のセンター同様特にインドシナ難民の為に設立されたのではない。1968年に移民受け入れ用に（インドシナ難民流出は1975年から始まった）建てられたものである。

Q. 施設の数 — 全14カ所

A. 大規模なものはシドニーでは2つ。ウェストブリッジとここ。メルボルンとアルバーニに各2カ所づつ。小規模なものは南・西オーストラリアにあり合わせて600～700人位が滞在している。

Q. 現在このセンターでの難民の数（%）

A. 100% 難民。現在1,130名で、今まで7,000名がここで生活した。収容可能人数は1,300名まで。その内、就学年令とそれ以下の子供は250名で、それ以上の大人は880名。家族数約300。（2人家族、3人家族、それ以上とまちまちで変化するため数値は変わる）

センター内部にはカギのかかる砂場、ジャングル・ジムのある遊び場があり、大人が英語その他の訓練を受けている時、幼児はここで職員が付きそって遊ばせ、それ以上の子供は普通学校のSpecial class にバスで通学している。

Q. スタッフの人数

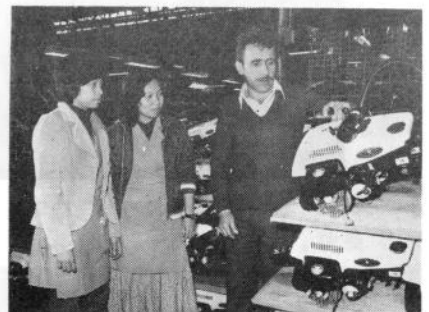
A. およそ100名。

Q. 彼らのセンター滞在中の目的。

- A. ① 一時的に収容し3食を与え、生活の経済的・物理的援助（失業手当の支給）
- ② オーストラリアで住む際に必要な事の訓練（電車の路線、人口や気候についての説明、英語、生活様式など）
- ③ 一人立ちする際の経済的およびその他の援助。Commonwealth Employment Service（職業斡旋所）による職の斡旋、医療活動など多方面に渡る。

Q. 職業訓練の有無。

A. 無。彼らはあまり技術のいらぬ仕事に就くようである。例えば、工場の製造ライン、レストラン、ホテル、サービス業など。



CESによる職業紹介風景

まて彼らにはセンターから15km 以内で職を見つけ、現金収入の道を開いている（ウェストブリッジ・センター）

Q. 滞在期間

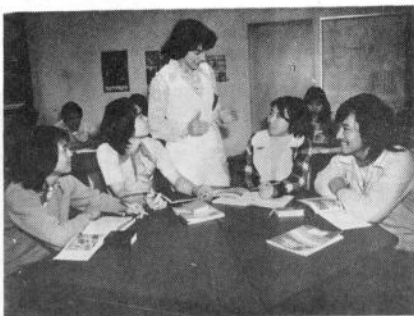
A. ケース・バイ・ケースだが一応決っている。

①独身者、3カ月

②2人家族（夫婦の場合）6カ月

③子供が複数いる家族、1年が標準

しかし、規定の期間が過ても職が見付からない場合とか、事情によってはCentral Review Committee（中央再調査委員会）が検討を加え延長する。（平均滞在月数は4カ月。そしてやはり難民の失業率は一般のそれに比べ高くなっている。）またセンターからオーストラリア社会定住への移行を助けるものとして、政府は自分の家に移転するものに最高600 Aドルの無利子の定住貸付金を与える計画を実施している。（彼らはセンターを出るとそれぞれの国別で集団になり、一つのコミュニティを形成してしまうことが多い。）



写真上：一船小学校でのインドシナ難民の
子供をまじえた授業風景

下：難民センターでのインドシナ難民
の英語の授業風景

1日の生活は9時～12時、1時～4時半までの勉強を中心として展開している。

彼ら難民には週ごとに政府からお金が支給されるが、（失業手当）、その中から設備費、食費等を払い、残りを預金することもできる。そして施設すべてに現在の国際状況を表わすかの様に4カ国語の表示がされていた。（ベトナム語、ラオス語、中国語、英語。）

センター内には1日おきに医師が出張をしてくる診療所もあり、フィリピンから来ているという看護が常時つめている。

宿泊施設にはパネルヒーターが備え付けられている。

多くの悲惨な状況をくぐりぬけてきた難民にとってオーストラリアという国へたどりついた事は、幸運な選択だったかもしれない。

現代オーストラリアは世界的スケールの景気後退気運の中で、数少ない将来性のある“ラッキー・カンントリー”でもあるからだ。

豊富な資源に支えられた豊かな経済的背景と、長い移民受け入れの歴史を持つオーストラリアは確かに日本の現状と比べるまでもなく、彼らに生活の治安を提供している。

しかし、センターでの全ての生活様式にみられる様に、オーストラリアはあくまでヨーロッパ文化を根底とする社会である。

オーストラリア統計局の予想によれば、1978年アジア系人口は2.1%で、ヨーロッパ系移民は多く見積っても6.8%にしかならず、依然として彼ら少数アジア系オーストラリア人が主体的に暮らすことの困難さが想像される。

そしてこの多数の定住者受け入れ政策は、必ずしも国民の広い支持を得てはいない。現在オーストラリアは第二次資源ブームとも呼ぶべき時期に入りつつあり、その文字通り無尽蔵の地下資源の開発に国を掲げて取り組んでいる。

しかしいかにせん人口が1千4百万人と少な過ぎ資本は無論のこと開発に不可欠の技術者が決定的に不足している。必要に迫られ、政府は移住審査基準を技術者および開発に必要な金属、電気、建設の熟練労働者に的を絞ってきている。（1980年1月発表）

これが現在オーストラリアへの一般の移民を以前より難しいものとしている。

オーストラリア政府は、毎年その移民（難民も含めて）受け入れ枠を発表する。その中で技術者等がまず優先されると、当然家族の呼び寄せを願っている先住民の希望は二の次に回さざるを得ない。おまけに難民の枠の決定には、その時の世界状況が、なかば強制力を持ってくるから必ずしもオーストラリアの国民感情を、この受け入れ数は反映させていない。国民の中には、“難民さえ来なければ、私は家族と一緒に……”という気持ちが無いとは言えない。

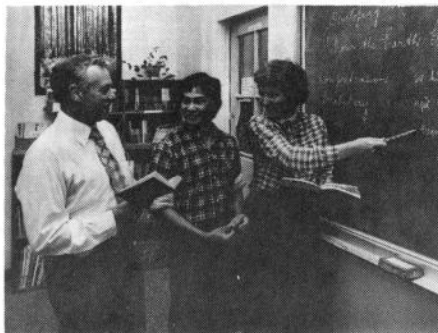
さらに6%前後という高い失業率が、その感情に拍車をかけている。去年11月には、オーストラリア労働組合評議会（日本の総評にあたる）は、海外からの大規模な熟練労働者の採用に反対する決議をした。また時としては、婦人労働者でさえ、青年男子の高失業率から職を持つことを心良く思われないことすらあると聞く。難民の就職状況に関する統計が手に入りにくいのも、あるいはこの様な国内事情があるのかも知れない。十分な答えは得られなかった。センター見学ですら渋っていた位である。

では何故、この様な状況下でも毎年多数の難民定住許可をしているのか。それはすでに述べたが、詳しく展開させると、その重要部分は、道義的責任という事である。しかしそれは日本人の想像するものと少々異なる。それはキャンベラにある戦争博物館に行くとその意味が納得できる。同国は1788年の建国以来、おびただしい数の戦争に参加してきた。およそ、オーストラリア兵が足を踏み入れてない戦争勃発地域は考えられない位である。その地理的位置がたえず孤独感と恐怖を呼び起こし、また歴史的な戦略上の重要点であることも、その熱心さを助長したのであろう。しかし何より忠実なる英連邦諸国の一員という事実が彼らには重かったのかもしれない。

その故か、西側の軍事行動には絶えず積極的に参加、協力をおしなかった。その微弱な人口からは考えられない程の兵士を戦場へと送り続けてきたのは痛ましい位である。当然ベトナム戦争にも大きな力を貸し、結果として多くの人々がボートで海をさ迷うようになったと考えている。その意味でのモラル・オブリゲーションなのである。（その中には共に、共産主義者と戦った同志という意味あいも込められている）最近の米国での日本に対する西側の一員としての軍備強化要請に似た発想の一つである。だから“日方は難民問題に対して不熱心”という批難は、西側の一員としての利益を甘授している日本は、その責任の一端を荷なうべきとの、現実的立場

から発せられている面も見のがせない。

さて、オーストラリアの難民の置かれている状況とは以上の様なものだが、だからといって暗い生活を送っている者だけでももちろんない。三年前にオーストラリアに着いた時は、英語すら話せなかったベトナムの少年が、メルボルンのリッチモンド・テクニカル・カレッジを首席で卒業して1,700 Aドルを賞金として受けたり、“本当にオーストラリアに来て良かった。以前と比べれば、天国の様だ”と話す、ホテルのレストランで働くインドシナ難民にも会った。環境の変化と闘いながら多くのインドシナ難民は、ささやかながらも生活の建て直しにその力を投入しているところだ。その先彼らを待っているものは何か。不本意ながら国をすてなければならなかったことへの痛みだろうか。生活の安定は、かえって彼らに忘郷の思いをつのらせるかも知れない。



Mr. Hoi

メルボルンのリッチモンド・テクニカルカレッジを首席で卒業したベトナム難民。彼は三年前、オーストラリアへ来た時は英語すら話せなかった。（1981年、校長のイワン・ホルムさん、移民教育省のグレース・ローワンさんと）

さてここに、マッケラー移民・民族問題担当相の言葉でこのレポートを終えます。

“一国だけで難民問題を解決はできない。

難民問題は国際問題であり、国際的対応を必要とする。難民キャンプの混雑振りは、より多くの国がインドシナの状況に対して継続的に対応することの重要性に目を向けさせる。

誰も難民の増加を歓迎しはしない。我々は状況に変化が来、誰もがその国を離れる必要のなくなること望む。”

（1月真夏のオーストラリアを訪ねて）

タイ国内プロジェクト状況

1981年2月23日現在

J.V.C of Bangkok

活動地名	進行状況	活動内容	活動費拠出者	担当者
ウボン (ラオス人キャンプ)	● ● ● ● ●	自動車整備教習所(教師タイ人2名, ラオス人6名, 生徒130人) 私塾援助 ①日本語クラス(初, 中, 上級の3クラス, 生徒50人) ②英語クラス(教師アメリカ人1名, ラオス人4名, 生徒500人) ③ラオス語クラス(生徒50人) 教育レクリエーション活動(歌, ラオスの民族舞踏, スポーツ用品の貸出しなど) 手工芸品(ラオス人によるショルダーバック, 財布等)の購入 織物学校(ラオス人教師による指導)	一般募金 神奈川県 一般募金 神奈川県 一般募金 茶道裏千家	* (熊岡路矢) 金子一弘 大野直樹 マリー・マルティヌ・キャマル 山下夏美
ノンカーイ (ラオス人キャンプ)	● ● ●	日本語学校 Aクラス 生徒8名 全員のレベルが一定, 定住者用 Bクラス 生徒10名 レベルが一定していない人の為 Cクラス 生徒2名 Bクラスの補習を行う 教育レクリエーション 教師ラオス人7名, 生徒90人, 5クラス(4~13才) 担任制では小学校のシステムをとる 手工芸品(ラオス人によるバック, 財布等)の購入	上智大学 上智大学 一般募金	*森 豊文 平賀増美 久保貴弘 小松恵子 青木哲子
ソクラー (ベトナム人キャンプ)	● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	食糧配給センター建設(キャンプ内の難民からボランティアを募り建設中) 難民用仮設住宅建設 公衆衛生(各戸にハエ取り紙の配布, 塩水で腐蝕したトタン板の修理, シワールーム増設) 看護活動(眼病・皮膚病治療) 子供の家(絵画, 折り紙教室など) ① キャンプ及びタイ農村への古着配布 ② 手工芸品(楯)の材料供給と購入, 販売 ③ 無人島漂着難民救出(ソクラー北々東150km)クラ島 ④ 花壇造設	一般募金 一般募金 一般募金 一般募金 一般募金 一般募金 一般募金 UNHCRの活動に参加 一般募金	*浜口功雄 古賀道広 古田政道 木原文雄 原田芙蓉 晶山 信 河合ふみひろ
アランヤブラテート (タイ・カンボジア 国境地域活動拠点)	● ●	国境周村のカンボジア人村に物資輸送(野菜の種・レタス・カボチャ etc, 農耕具, 学用品, 毛布, 害虫駆除用農薬) アメリカのボランティア団体CAREの配給する補助食料の補助	西本願寺 CAREの活動に参加	*西崎恵司 田島 誠 河西マリ
カオイダン (カンボジア人 キャンプ)	○ ●	自動車整備教習所(教師クメール人8名, タイ人2名, 日本人1名, 生徒月80人, 年間960人の予定) 井戸堀り	UNHCR UNHCR	* 熊岡路矢 養田健一
バナニコム (第3国定住待の人 たちの一時収容施設)	●	教育レクリエーション活動(生徒数50~100人, カンボジア人, ベトナム人地区で, 英語・算数・歌など)	神奈川県	*相沢秀夫 鈴木ミナミ 柳沢道寛 村上純子 川嶋和弘 山隈 悟 グリニス・ディヴィス タマソン
クロントゥーイ (バンコク市内のスラム)	● ● ● ●	図書活動(現在50種50冊の図書, 閲覧のみ) 電気工養成訓練所(スラムに住む人のための職業訓練所, 内容は, 家庭内配線, 1日2時間3ヶ月コース, 生徒数15名・教師はタイ人) プラティープ財団への奨学金援助 通路補修・環境整備	神奈川県 一般募金 一般募金 モラロジー研究所	*福村州馬 柴田紀子 皆川伸彦 岩崎美佐子 ニール・リー 菊地明男
ゴリラム県13ケ村 (東北タイ)	●	児童施設建設	神奈川県	*山本敏幸 *金子哲也 村山康弘 清水 稔 加藤敦紀 齊藤良樹 会田容弘 大場佐知子 久保田一郎
バンコク事務所	● ● ● ● ● ●	事務 会計 総務 ルンビニー衣料整理 ジャスマグ衣料整理 ハンディクラフト	星野昌子(事務局長) クリス・シュビルマン, 大石由美子, ソンマイ 榎本百合子, 横畑雅子, 伊東清子, 上田農子, 今村信子, 磯村美智子, 奥村 松崎雅子, 花崎啓子, 上田義子, 松村悠子, 尾谷暢子, 山内協子, 小川寿美子, 深谷範子 道代トリシリビサル, 牧野千佳子, 前田卓子, 嶋村美智子, 吉井康子, 本多加津子 竹島節子, 林由紀子, 海老原美子 地曳いく子, 黒川恵子, 八田さと子, 小林正枝	
東京連絡事務所	●	事務, 機関誌編集	*税田芳三, 河井淳一, 峰野美智子, 堀えみ子, 水野孝昭, 川島保男, 大久保俊彦, 木村真人 戸田耐子, 渡辺厚子, 黒川京子	

●実施中 ○計画中 ①不定期に活動中 *リーダー

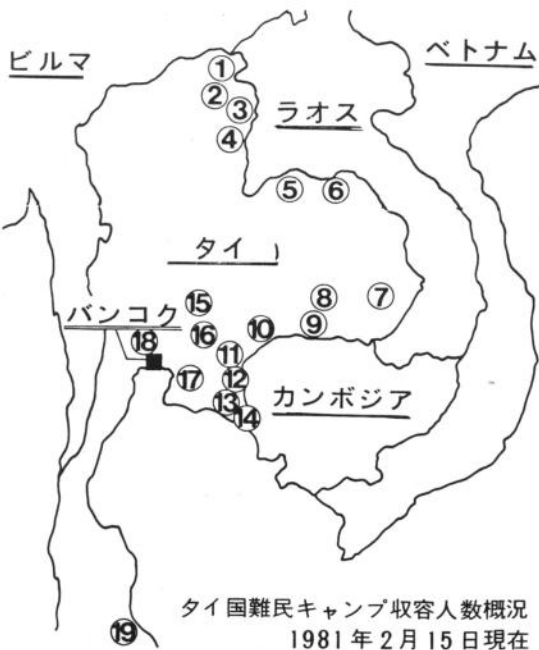
一般募金とは、特にその使途に指示のされていないものを指します。

JVCプロジェクト必要人員一覧表

1981年2月現在

	内 容	必要人員	期 間	リーダー	備 考
ウ ボ ン	自動車整備 ◎織物学校運営	1人	長 期	熊 岡	自動車整備工資格者
		男性1人 女性1人	長 期	山 下 青 木	
ノ ン カ ー イ	◎リーダー	1人	6ヶ月以上	(森)	英・仏・タイ・ラオス語のうち1つ以上できる人
ソ ン ク ラ ー	建築・土木 公衆衛生	男性2人	長 期	浜 口	
		女性1人	長 期		
アランヤ プラテート	供給物資調達・運搬	女性1人	長・中・短 いずれも可	西 崎	詳細は面談の上決定
カ オ イ ダ ン	自動車整備(大型・普通・二輪)	2人	長期(3ヶ月以上) (交代でも可)	熊 岡	各種資格者 外国語が1つできる人
	発電機・発動機・農業機械取扱修理	2人			
	農業・河川漁業指導	2人			
パナッニコム	教育レクリエーション	1人	長 期	相 沢	専門家
クロントゥーイ	大工仕事 教育環境整備etc. 本のビニールカバーとじ	1～2人	1ヶ月以上	福 村	タイ語(英語も可) できる人 詳細は福村または 岩崎へ
		2～3人	短期でも可		

◎は至急



タイ国難民キャンプ収容人数概況
1981年2月15日現在

	キャンプ名	国 別	2 月	1 月
1	チェンコン	L	4,970	4,918
2	チェンカム	L	3,376	3,452
3	バンナムヤオ	L	9,769	9,815
4	ソプトュアン	L	8,293	8,144
5	パンビナイ	L	29,902	30,005
6	ノンカーイ	L	27,832	27,518
7	ウボン	L	19,058	19,142
8	ルンバック(スリン)	K	2,174	8,293
9	カプチュアン	K	8,052	56,673
10	カオイダン	K	51,561	17,721
11	アランヤプラテート	K	1,944	1,927
12	カンブット	K	17,804	—
13	ラエムシン	V	—	11,125
14	マイルート	K	11,343	—
15	シキウ	L,K	1,702	36,661
16	サケオ	K	—	10,278
17	パナッニコム	K,L,V	12,804	3,216
18	ルンビニ	K,L,V	990	1,258
19	ソンクラ	V	6,263	4,474

収容されている難民の国別

K…カンボジア L…ラオス V…ベトナム

※「—」は情報未入

ブリラム児童施設プロジェクト中間報告

金子 哲也

首都バンコクよりウボン行ディーゼル列車に揺られること8時間強。そこからさらにバスに乗り換え、鶏を抱えた人々とともにのどかな田園地帯を3時間程走る。我々の今回の活動地、ここブリラムは、タイで最も貧しいと言われる東北部に位置し、カンボジア国境までわずか4kmの寒村である。

2月14日より活動を開始し、3月2日までに最初の村(サイト5)が終了した。その間24名のボランティアが参加して、ブランコ(2座席)、スベリ台、鉄棒(3段)各1台、シーソー2台を丸太、平板から加工製作し、馬飛びのできるようなタイヤ6本を埋めた。(スベリ台などの材料は、のちにタイ側からの要請によりスチール材にとりかえられた)

ほとんどのボランティアは、こうした作業の経験を持たず、まさにTrial & Errorの連続。30度を超す暑さのなか、みんなで知恵を出しあっての奮闘振りである。そうして、ひとつひとつの遊具が出来上がり、子供たちの歓声と笑顔に迎えられる時、言いようのない喜びがボランティアひとりひとりの心に湧き上がってくる。



遊具製作をきっかけに、村人との交流も生まれている。近ごろでは、我々の作業の終わる4時頃になると、人々が地酒を手にとって来るようになった。タイ語と日本語が飛び交って、なごやかな酒宴のはじまりだ。あるボランティアは非常に強い地酒をガブ飲みしてみせ、見守る村人達の度肝を抜いた。

先日は、近くの小学校に招かれた。門に入るや否や一瞬たじろぐほどの拍手の渦。日本の歌、タイの歌を披露しあったり、空手、柔道のデモンストレーションやガキ大将によるタイ式ボクシングなど、タイの子供たちと楽しいひとときを過ごした。

また、我々の宿舎のあるニコム村(サイト5から約6km)で、祭りに招待された時には、上気したボランティアが観客席から踊りの輪のなかへ飛び入り。その後、彼の名声?!はこの地域で知らぬ人のない程にまでなっている。



村々は、未だ1976年以来的の開発の途上にあり、耕作地も十分でないので、WFP(世界食糧計画)の配給する米が人々の日々の糧となっている。勿論、電気、水道などは無く、ランプ、井戸水を使い、家財道具もほんの必需品程度である。

20代の若者たちは、ほとんどバンコクに出稼ぎに行ってしまう。残された子供たちの発育は悪く、15才の子供でも日本の子供の10才程度の体格にすぎない。小学校は、UNICEF(国際児童基金)その他の援助で外見は立派だが、その一方で教育上欠くことのできない教材、学用品の不足ははなはだしい。日本での物質文明の感覚をそのまま基準にして考えるのは間違いかも知れないが、貧しいという感じはやはり否めない。

しかしながら、人々は、そのなかで自然と一体になって日々の生活を営み、素朴で心暖かい。我々日本人が失ってしまったなにかを持っているという印象さえ受ける。勿論、こんな辺境の地にもHONDA、TOYOTAの車がいきかい、YAMAHAのバイクが彼らの足となるというように、日本の物質文明が容赦なく入り込んできているというのも事実だ。

彼らの生活のリズムを破壊する事なく、援助するにはどうしたらよいのか、我々に何が出来るかを、常に冷静に考えながら、彼らと触れ合ってゆきたい。

クラ島難民救済報告

古 賀 道 広

UNHCRオフィサー小泉氏の誘いで、JVCソクラからは昨年3度に渡り、クラ島へ難民のレスキューに出かけた。

クラ島はソクラの北150キロ程のシャム湾に浮かぶ地図にもない無人島である。遠くから見ると亀の形をしており、一面緑に覆われていて、砂漠の中のオアシスを連想させるのだが、近づいて見ると褐色に風化した花崗岩の岩肌がいたるところむき出しになって聳え立ち、わずか亀の首のつけ根にあたる浜だけが人々の上陸を許している。

浜は一面珊瑚が打ち上げられ、海は揺れる宝石、みごとなコバルトブルーだ。島の上空を時々渡り鳥たちが飛びかう。ある事実さえなければここは南国の平和な島だ。

レスキュー活動はソクラから100トンの漁船に乗り込み、10時間ほど船に揺られたあと、島の近くに船を止め、難民たちをゴムボートで救い出して一時収容所まで届ける。

3度目に出かけた時は12月14日だった。朝の8時に小泉氏から連絡があり、居あわせた私と戸田さんが出かけることになった。ソクラの港を10時に出航し、クラ島に着いたのは夕方の6時である。

何名の難民がたどりついているのかは正確に分らない。島へ近づいても我々の船を海賊船と思ってか人影は見えず、停泊地を求めて移動しているうちに木陰から現われ始め、やがて大さわぎになりたき火で救助を求めてきた。

波の強い日で、ゴムボートは降ろしたものの、エンジンの積み込みに苦心する。母船とゴムボートでは揺れの差がはげしく、潮の流れも強くてバランスをとるのが難しい。

悪戦苦闘の末、ようやくエンジンを積み込み、小泉氏、フランス人看護婦、警察官、乗組員、私の5名で出発した。すでに薄暗くなっている。

岸へ着くと男たちが歓声をあげて走り寄ってくる。飢えと渇きと最も怖い海賊の襲来におびやかされてきたい彼らにとっては、すべてを忘れさせたにちがいない。珊瑚の浜は決して素足で走れるようなところではない。やがて男たちの掛け声で森の中から女たちや子供が集まってくる。



2艘分、77名の難民を漁船に収容したのは夜の8時近かった。後半はわずかの星の光をたよるだけで、しかも全身ずぶぬれの震えながらの救出作業だった。

最後になってまだ3名の女性たちが山中にこもって出て来ないという。翌日の作業にしてその夜は停泊したまま一夜をすごした。

翌朝早く朝食の準備も兼ねて難民1名を含む6名で島へ出かけた。マイクを使って島を一周し、全員で叫んでも応答がない。人の侵入を拒む北側の絶壁に入り込んだら、とうていさがしだせないし、たび重なる海賊の暴行を受けた彼女らにとって、我々の呼び声もさらに錯乱をよびおこすのがせいぜいだろう。あきらめざるをえなかった。

彼らの中で最も悲惨だったのは、娘二人を海賊に拉致された母親だった。彼女は涙を枯らす時がなく、娘たちの搜索を我々に訴えかけて来たが、このケースの場合、彼女らが生き続けている可能性はまずない。ソクラキャンプに収容される難民たちの中でクラ島を経由して来る者は多い。彼らから様々な話を耳にする。クラ島へ来る難民たちの大半が海賊に船を沈められ、通りかかった良心的な漁船に助けられて送られて来るか、その海賊が暴行めあてに監禁するためかである。ポート・ピープルたちの中でタイの海賊に出会わなかったというケースはめったにない。生き残れるのは半数といわれ、残りは海の藻屑と化す。

こんな話も聞いた。A氏の船は海上で海賊に襲われて舟が沈み、7名が死亡、クラ島に監禁され、一週間後に救助されたが、女たちは連夜の暴行を恐れて山中に逃げ込んだ。何もないと知った海賊たちは71才になる老女に暴行を加えたという。信じたくない

い事実だ。

今もあの島で想像を絶することが起きているかもしれない。

彼らは悲惨だ。



死者にこだわる

戸田 耐子

クラ島に辿り着いたのは、もう陽が落ちた後だった。

彼らは焚き火で相図してきた。

暗闇が迫ってくるなか、島へボートを出した。島と船との間を幾度となく行き来する間に、すっかり暗くなりその晩は船で夜が明けるのを待った。

ボートに乗り島へ向かう時、私の腕と足は、ガクガク震えていた。

島に着いた時、私の頭の中は、「早く船に乗せて安心させてやりたい」その事で一杯だった。そんな私の所へ一人のおばさんが泣きながら私の腕に縋り、しきりにベトナム語で何かを訴えてきた。

何を言っているのか分からず、てっきり恐怖と嬉しさのあまりに、興奮しているものとばかり思っていた。だから私はタオルで涙を拭いてやることと、抱いてやることしかできなかった。

彼女は腕に傷を負っていた。他にも数人傷を負った人がいたが、みんな潮風で爛れた肉が赤黒く浮き出していた。

髪を振り乱しずっと私の腕の中で泣いている彼女をみているうちに、何故だか私も涙が込み上げてきた。彼女は両手を合わせ、拝むように私に縋った。

それから移動が終わり、全員船に乗り込んだはずが、まだ女性三人が島に居る事が分かった。彼女らは恐怖のあまり私達を海賊と思いこみ、山へ逃げこんだという。

翌朝再び島へ行く事にしてその晩は船で夜を明かした。狭い船内に七十七名の人々が眠った。

落ちついて辺りを見まわすと、まだ乳飲み子もいる事に気づいた。こんな幼な児までもが祖国を棄て、死を覚悟で海を渡る。いったい現在のベトナムはどうなっているのか――。

ガスの欠乏で食事もできないまま朝が来るのを待った。揺れる船室から聞こえてくるのは、誰かが船酔いで嗚咽をあげる声、幼な児の泣き声、密かな語らい、そして波の音と船の軋み音だけだった。

おばさんはずっと泣いたままだった。彼女は一人だった。そして彼女を慰めようとする者は、一人もいなかった。みんな無表情だった。

翌朝又、ボートで島へ向かった。みんなの朝食と三人の救出の為だ。食事作りはまさに原始的作業そのものだった。焚き火を懐し鶏の頭や足を1本の錆びた包丁で叩き切り――。タイの警官の技をただ茫然とながめていた。そしてそこに「生きる強さ」を感じた。ほんとうの「力強さ」と「行動力」を感じた。

山に逃げ込んだ女性達は遂に、姿をみせてはくれなかった。

四方に散りみんな大声で叫んだ。「シムラ・ソクラ」と。(ベトナム語でソクラへ帰るぞの意)

山へ逃げた彼女らの心を考えたら同じ女として、言葉では表現しきれない気持ちがこみあげてくる。

悲しかった。返ってくるのは自分のこだまだけだった。

そして午前10時頃船はソクラへ向かった。三人は島に取り残されたまま、恐怖におびえていることだろう。

船が海岸近くについた時、波があれ ボートで島へ渡れず進路を変更してやっと陸に辿り着いたのは夕方だった。三十数時間の船出だった。

通訳を頼みおばさんの話を聞いた。ベトナムから逃げる途中、海賊に襲われ(彼らは海賊に6度襲われた)娘二人が連れ去られたという。そして捜してほしいと言う。女三人で逃げてきたという。

その生きる望みを求めて祖国を捨ててきた親子が、こうも無惨な姿で引き裂かれる現実に出会って私はうろたえた。母親が娘を失った悲しみをどう表わせよう。しかも生きていても死んでいるともわからないまま。

彼女に手渡された彼女と娘二人の名前を警官に預けた。キャンプにいたら探してくれと。

しかしどうやって探せるというのだろうか。祖国を棄てた彼女らにはもう国籍も住所も存在しない。あるのは名前だけだ。海賊達は過去女を連れさったり殺したり、強姦したりしてきた。連れ去られまんが

いち生きていれば、どこかに売られることになる。はたして海賊がそんな事をするか。顔を見られ、怨まれ強姦した上生かしておくのだろうか。きっと海へ放りなげられるんだ。今までそうしてきたように。ふっとそんな想いが私の頭の中をよぎった。絶望に近い想いだった。

そして、過去のベトナム戦争という長く苦しい戦いを民族自決の力でのりこえた彼らが、そんなにしてまで祖国を棄てなければならなかった社会を恨めしくおもった。ベトナム戦争のはかりしれない傷跡は、今もおお続けている。

私はこの救出の間中、一つの歌詞ばかり繰り返していた。「生きてりゃいいさ」と。

とにかく今彼女は生きている。娘を失った悲しみをのり越えて、これからの人生を力強く生きてほしいと願うことしかできない。

いったい人間が人間に何ができるのか。自分の無力さばかりおもしろ知らされた。

みなさんのほとんどは、何故自分で警察にかけあったりキャンプでの定期的放送の手段を行動で示さなかったのかと非難されるでしょう。実際そうである。私は完全に主観的に対処していた。後悔で一杯である。そして人間対人間、まして人の生死にかかわる事態には客観的判断が必要である事を痛感した。

今でも時折、あの時のおばさんのすがるような瞳が私の胸をしめつける。

だから私はこだわりたい。“過去”に。過去があるから現在があり、そして未来がある。戦争というすべての事実を記憶の底に通りすぎて来た過去として眠らせておいてはいけない。そこから生きる事を始めなければ。最後に、次の文章を掲げます。

「死者にこだわるということは、ふたたび、そのような死者を出さないことだ。そこに心をくだし、努力をするということだ。そのためには、まず、いくさをなくす。これが第一だ。結果として、平和が来る。自分の安泰、繁栄のためにだけ平和があるのではないということだ。わが身の安泰、繁栄のためにだけ平和があるというのでは、事情次第によっては、そのために他人を抑圧することにもなればいくさを起こすことにもなる。まず、死者を出さない。そのためにいくさをなくす。それが目的であって、平和は結果だ。(中略)歴史はどのような発展のかたちをとろうとも、神によってではなく私たち人間の手によってかたちづくられるものだ。もちろん、死者たちの手によって未来の歴史はかたちづけられない。ただ、死者にこだわることによって未来のありようを考え出すことはできる。

小田 実「死者にこだわる」より

1981年、1月末現在、ソクランキャンプの人口は7,000名を越えたと知らせが入った。

—海で死んだ弟、妹に捧げる—

前川 誠写真集(1978年4月30日発行)

「日本の中のベトナム難民」より抜粋

水もなくなった。食べる物も今はない。年老いた女は子供の小便まで飲んでる。幼い生命は日に日に弱っていく。漂流をはじめて10日目。21才の若者が海に飛び込み自らの生命を絶った。緊張の連続にぷつりと切れた糸。この青年にとって極限状況の中で「生と死」の境はあまりにも簡単な一線だった。

漂流18日目。11才の少年は、船底に横たわったままその短い灯を消した。

南シナ海の波は高い。波間にもまれる小舟はまるで大海の中の泡のようだ。

「自由と人間の権利」を求めて海に乗りだした23名の人々。しかし、今は21名になった。

漂流19日目の朝。8才の少女もとうとう目を閉じてしまった。相ついで消える幼い子供の生命。

もう我々に自由という明日はないのだろうか。まだ多少動ける者は、ロープで体を縛り最後の泳ぎを楽しもうと言う。自由の海でおもしろ泳いでみたというのだ。

これまで着ていた衣服はほとんど燃やしてしまった。目の前を通り過ぎる船に合図を送るために。燃やせるものはほとんど燃やした。明日は誰が死ぬのだろうか。でも私達は恐れはしない。自由の海で死ぬことができるのだから。父は今ベトナムの収容所に入れられている。生きているか死んでいるかわからない。でも私達は自由の海にいる。

22隻の船が私々を無視して通り過ぎた。日本の船が最も多い。同じアジアの国。アジアで唯一の先進国日本。祖国ベトナムには日本の商品が溢れていた。兄弟国、日本の船が……。

漂流20日目の午後、ギリシャ国籍の船が目の前に停まる。年老いた母がボートに乗り移る。一人又一人と。私達は助かったのだ。

しかし、昨日、そして一昨日何も食べるものもなく飲み水もなく死んでいった幼い弟、妹。生と死の極限状況の中で自らの生命を絶った仲間。

小さくなってゆく私たちの船。あの海のどこかに弟や妹や仲間が眠っている。私達はこの日を決して忘れはしない。溢れる涙はとめどなく流れていた。

「ボランティア」ということ

小 泉 康 一 (UNHCR)

この度、UNHCRソクラーキャンプ事務官の小泉康一氏から、JVCに一文をお寄せいただきました。——「ボランティア」ということ——というこの文章には、ボランティアの基本精神、JVCの

活動のあり方などに対する多くの示唆、問題提起が織り込まれています。ここに、今後のボランティア活動の発展の礎になることを願い、その一部を紹介させていただきます。

UNHCRのポスターの標語に「Your sympathy cannot help a refugee. But it is a beginning」(同情では難民は助からない。しかしそれが始めだ)というのがある。1980年戦火のカンボジアを逃れて来た瘦細った少年が写ったポスターだが、さすがに長いUNHCRの難民救援活動の中から培われてきたエッセンスがピタリと表現されている。確かに観念で「Refugee」(難民)を助けることはできない。「Humanism」(人道主義)的感情のみでは助けることはできない。難民の多くが主に全世界の発展途上国の政治・経済・社会不安から生み出されている現実是我々にそれが、決して短期的問題ではないことを教えてくれる。長期的な取り組みが必要な課題である以上、今後は「難民援助」の大義を達成する上での「基本的視座」と「組織」が必要とされる。

JVCの顧問であった栗野鳳氏(前UNHCR特別顧問現、広島大学教授)は彼の「JVCボランティアの任務と心構え(案)」(1980年12月)の中で「JVC活動対象を次の様に定めている。

「『日本奉仕センター』(JVC)に属するボランティアの任務は難民及びそれとほとんど同様に恵まれない境遇の人々に対する人道的援助の為の活動に奉仕することである。」(棒線は筆者)

同氏によるこのドラフトは葉半紙一枚のごくごく短いものだが、

多くの示唆に富むものである。その中から当面JVCの援助対象ということで取り上げてみるが、上記のようにJVCの活動は「難民」というものに限定されていないということである。いうなればそれと同時に基本的な人間としての生活を脅かされている「被抑圧民」(Unprivileged Person)をも視野に入れ、JVCのタイのクロントイ・スラムの活動、極貧の東北タイでの活動がそれを物語っている。それとともに対象地域の限度も行なわれていないことである——世界中の難民、被抑圧民への対処——JVCの発展の予測。誤解を恐れず大胆に言えば“将来起り得る可能性への対処を全て包含したグローバル(global)でフレキシブル(flexible)な視野”が意図されているということであろう。この“栗野テーゼ”は将来成文化され、JVCの「基本的視座」になることが期待される。

そしてそれとともに忘れられてはならないのは、難民および被抑圧民の「自立」という概念であろう。ボランティアが求められているのは難民自身の「自立」を助けることであって、永久的な援助が求められているのではない。物質的にも当然彼らのニーズに沿って適切な方法がとられるべきであろう。この概念は上記の栗野テーゼといわば互いが補い合って「戦略」と「戦術」の関係にも例えられるであろう。

難民の問題は世界中に広まりつ

つある。被抑圧民を入れるとその数は莫大なものになるであろう。人種、宗教、国籍、特定社会団体の構成員であること、および政治的信条等々の理由で出身国の保護が得られない人々はますます増えている。植民地における独立への闘争と関連しているもの、最近独立を達成した諸国における政治的、宗教的問題を根ざすもの、政変等で住み慣れた土地を離れなければならないもの、こうした何百何千の難民および生活の基盤を失った人々を、定着させるための難民援助は時にはゼロから出発して何百人もの新しい村落共同体を作って難民の土地定住を促すこともしばしばある。それゆえ難民援助活動はしばしば開発と密接な関連がある。

私はUNHCRに入ってから実際に難民キャンプで働くようになってから「ボランティア」という言葉をずっと長い間考え続けてきた。そして、「日本奉仕センター」(略称JVC)所属の若者達が、1980年4月頃から、ソクラーキャンプに入るようになって、尚一層それが加速化されたといってもよい。既に述べたようにこの言葉の中身は、特にJVCの現実の活動を通じてある一つの内実を与えられてゆくのであろうが、そうした意味で本小文はあくまで過渡的・個人的なものでしかないが、これを叩台に以下建設的な論議が巻き起こることを期待してやまない。

(尚、本文は一部省略させていただきます。)

テーマ研究

日本の中の「難民」たち

連載第3回

水野孝昭

●内なる“国境線”を超えて

難民の受け入れには、様々のトラブルを伴うことがある。報道に現われただけでも幾つか容易に思ひ起こすことができるが、現われない部分で難民も含めた当事者が困っていることも少なくない。

『ベトナム人には衛生観念がないので台所で髪を洗ったりする。』というので、難民自身によく聞いてみると、湯の出るシャワーが1つしかなく、いつも満員で仕方がなかったとのこと。こうしたコミュニケーションギャップに基づく誤解・曲解の類には枚挙に暇がない。

もとより難民として我々と同じ人間であり、窮地に追い込まれた時には自分を守るのに必死になることもある。ただ同じ人間としての尊厳を保っていく条件自体が、彼らには十分保証されていない点を見落してしまうと偏見に陥ることになる。難民に接する人には、そういった人間の弱さを、自分の弱さと照らし合わせて理解していく忍耐強い態度が必要とされている。

「性格が粗暴」といわれた難民がいた。しかし、トラブルが起きるにはそれなりの背景、原因があるはずで、それらを正確に見極める努力をせずにレッテル貼りをして事足りれりとする態度には、かつての「暴力学生」キャンペーンから、現在の「保安処分制度」に通じる安易なものと考え方が感じられる。

現場で生身の難民に接している人々は、文字通りカルチャーショックの連続だ。そのショックの中から何を汲み取っていくのだろうか。難民達も、いや難民なればこそ生きるのに懸命であり、とても一般論のキレイ事だけでは済まされはしない。

しかし、こうしたいわば汗みどろの精神的格闘の中から国籍や膚の色の違いを超えた本当の国際理解の芽が生まれてくるのではなからうか。

一部の大人達の間から強い抵抗のあった難民児童の就学にしても、子供達の間には“国境線”はなかった。

◎難民の授業ボイコット

79年4月28日からは日本定住者19名を鎌倉雪の下教会黙想の家に集め、現在の大和・姫路に先立つ難民定住センターをUNHCR・日本国際社会事業団（ISS）との共同で開設、3ヶ月の予定で日本語教育等がスタートした。

しかしこの計画は東京サミット前日の6月27日、難民達自身による授業ボイコットという思わぬ形で頓座することになった。その時難民が日本政府やUNHCRに提出しようとした要望書は、日本定住に際し何が不安なのかを彼ら自身の言葉で語っているので引用しよう。

「1. 新聞報道を見ると、日本政府には難民の定住促進に対する何等明確な計画がない。

2. それ故、我々としては日本政府が我々に如何なる処遇をしてくれるのか、それを知るまでは日本に滞在する決心をする事は出来ない。（以下：家族と一緒に生活できること、年齢に応じた就学、就職、保健医療、日本人と同一賃金の保障、老齢年金の適要を求め）、我々は元留学生が（日本）政府から何も得ていない実態を知っている。我々としては日本への滞在を同意する前に、我々の生活、生活様式がどんなものになるか知らねばならない。（中略）日本へ来て定住を決定するすべての人のために、我々はユダヤ人街的特殊集団ないし“セカンドクラス”市民となりたくない。これは我々の子供の気持ちのためによくないからだ……。」

この運動の先頭に立っていた難民は、実はジュネーブのUNHCRに、カナダへの定住申請をしていた。彼らの要望をできるだけかなえようと奔走していた人々にとっては、拍子抜けも大きかったことだろう。しかし、一人の人間の個人的信義の問題と、日本にいる難民全体の地位の不安定さとの問題とを混同する事は許されない。この文面でみる限り、これらの要望は日本がもし難民条約に加入していれば、当然の権利として保障されていたものばかりである。裏を返せば、日本人が外国人、とくにアジア人の人権について余りにも鈍感な感覚しかもっていなかったことが、こうした事態を招く遠因だったのである。

もし日本社会が、制度的にも人々の意識の上でも一人一人の人間を尊重する「開かれた民主社会」であるならば、どうしてせっかく北九州で職を見つけた日本定住第一号マイ・ヒュー・ロイさん一家はフランスに去っていったのか。「日本社会の閉鎖性」の実態を日本人自身の問題として具体的な局面で検証していくことが、最も必要なことではないだろうか。

○定住対策の開始

6月の日米首脳会議、東京サミットでのインドシナ難民に関する特別声明を経て、7月には国連事務総長がインドシナ難民問題国際会議を開催、日本の園田外相（当時）も演説に立ち、難民問題を「国際社会全体にとってのチャレンジ」と捉え、日本政府の対応を説明した後「この会議を難民問題解決のための新しい国際協力の出発点」と位置づけた。

この国際的動向に合わせて、7月13日閣議了解でインドシナ難民に対する具体的な定住促進政策が決定された。定住条件は大幅に緩和され、「ヴィエトナム難民対策連絡会議」も「インドシナ難民対策連絡調整会議」と改称、具体的事業を行なう団体としてかつてヴィエトナム戦争の被災孤児に対する職業訓練を行なっていた財団法人アジア孤児福祉教育財団を指定、9月4日アジア福祉教育財団と改称、難民事業本部を設置した。

12月11日には姫路、翌80年2月29日には神奈川県

大和市に定住促進センターを開設した。周囲の反応は様々で、センター設置反対を叫ぶ人もいれば、寄附・ボランティアを申し出る人もいた。時を同じくして東南アジア各地に一時滞在している難民を対称に、日本への定住適格者を調査するため、5つのインタビュー・チームをタイ・マレーシア・フィリピン・インドネシア・香港の各地に派遣し、1,822人にインタビューし453人の定住適格者を見出した。

この時点になって日本への難民定住対策は、漸く本格的に開始されたと言えよう。日本に最初の難民が到着してから、実に4年余りが経過していた。この時間の流れの重みと、現在の難民定住対策自体が国際世論に押されていわば「外圧」に屈する形で始まったのであって、決して日本国民の間から「内発」的に盛り上った難民受け入れ推進運動の成果であったわけではなかったことは、明治以来の日本人の意識の上での「開国」の度合を測る例証として、長く記憶されることだろう。

年間購読についてお知らせ

JVC東京連絡事務所では、インドシナ難民救援活動の輪を広げるため購読者を募っています。

購読者の方々には毎月機関誌「Trail & Error」を送付すると共に、講演会、写真展等のお知らせを致します。

年間購読者の種別と購読料は次の通りです。

- 賛助購読者 年間1口 10,000円
- (団体・法人) 1口につき毎月4部送付
- 一般購読者 年間1口 3,000円
- (個人) 1口につき毎月1部送付

— 申し込み方法 —

郵便振替にて。

口座番号 東京3-54186

通信欄に住所、氏名、学校または勤務先を明記のうえ、購読種別と購読開始月もお忘れなくお申し込み下さい。

〒151東京都渋谷区代々木神園町3-1

オリンピック記念青少年総合センター(OMYC)内
日本青年奉仕協会(JYVA) 気付

JVC東京連絡事務所

(1981年3月5日現在) 年間購読者

加藤 博	井上 聡	森川利根子	関根 良樹
R.アビト	和田 節子	奥山 爾朗	青井 雄二
坂本進一郎	宮崎 明子	国府千嘉子	桐木 巖
藤田 和恵	北川 忠男	川村フク子★	児嶋嶋一郎
芝川 又美	井出 貴江	飯島みどり	太田 典子
高橋 裕介★	井村文化事	内田加代子	萱野 浩二
出口 和子	永井 聖子	阿部 優子	広瀬 詔子
権田 潤	片野 敏利	渡辺 厚子	佐藤すみ子
瀬本 正之	進藤 公浩	亀山 直見	沢本 勉
石路 美玲	高山 徳也	興津 暁子	高塚 勝
内藤真理子	日本キリス	辻 正敏★	平和主義市
小沢 紀子	細川 考	長富 孝光	民の会
上西 寛一	小林 考男	久保野 篤	菊地 一雅
坂田 光史	中田 恭子	税田 芳子	安部 要一
中村 利恵	市川 昭子	花田 義昭	佐々木宗子
稲垣三千穂	坪井 いく	紙田 幸一	有江 恵
★全国社会福	山田 耕一	愛甲 正也	ノートルダ
祉協議会	和男	小沢 靖子	女子大学
清塚	谷 敦	齊藤 隆	岩波 玲子
熊岡 親雄	川崎 満考	橋口 史朗	河北青年会
太平 悦子	尾崎 信三	須藤みはる	議所
阿部利根子	今井 敬子	石原 良昭	藤田 素子
★天理教アジ			小松 博史
ア一課			志村 悦子
			黒川 京子

(申込順: 敬称略★は賛助購読者)

会 計 報 告

1981 1/16~2/15

(単位はB, 現在1パーツ約10円)

内 容	収 入	支 出	残 高
前 月 残			4,186,711. 99
寄 附 送 金	682,380. 75		
事 業 費		562,975. 50	
事 務 経 費		58,338. 00	
UNHCR へ送金		35,041. 00	
UNHCR 別口座作成		15,959. 00	
計	682,380. 75	672,313. 50	4,196,779. 24
		差引残高	4,196,779. 24

○事業費内訳

プロジェクト	内 容	金 額
ウ ボ ン	活 動 費	48,350
	自動車整備備品	5,000
	ハンディクラフト	30,000
	織物学校建設費	47,576
ノ ン カ ー イ	活 動 費	15,360
	ボランティアホーム ガス台	2,030
カンボジア国境	活 動 費	60,000
	管 理 事 務 費	12,000
カ オ イ ダ ン (U N H C R)	井 戸 堀	24,000
	職業訓練所建設費	16,040
ソ ン ク ラ ー	活 動 費	20,500
バナッニコム	活 動 費	20,000
	民族舞踊ホール建設 費不足分	5,507
クロントーイ	活 動 費	28,101
	図書館建設・維持費	63,000
	車 の 保 険	5,511. 50
ブ リ ラ ム	活 動 費	110,000
J V C オフィス	事 業 費	40,000
BKK ボランティアホーム	家 賃	5,000
助ける会よりエイトキン氏への補助立替		5,000

○今月の寄附送金者(敬称略)

橋本佳容子 裏千家 吉野晋 戸田けい子
 山辺中学校 文化放送音楽教室一同 諏訪耕
 モラロジー研究所
 文化放送青春キャンパス事務局 赤松悌介
 山陰放送チャリティーもちつき大会 壊れい子
 宇山栄次 五十嵐幸子 秋山英正 稲垣三千穂
 宮田茂男

○今月の寄贈者(敬称略)

引田 竹嶋 井上 東京リエゾンオフィス
 有井 政岡 阿部

— J.V.C とは —

J.V.Cは、1980年2月バンコクに設けられた民間難民救援団体です。募金や各民間団体等の支援を受けながら、タイ国内の難民キャンプとスラム街、農村で救援活動に携わっています。

同年4月には、CCSDPT(タイ国に於ける避難民救援連絡委員会)に登録されました。

☆あなたの善意の送り先☆

J.V.C東京エリゾンオフィス
 郵便振替口座 東京9-27495

住所・氏名をかならずお書きそ
 えください。



燃えるような日差しの下、彼女は母親と共に米の配給を待っていた。レンズを向けると、とてもかわいい笑顔が返ってきた。

(ノンチャン難民村にて)



80年6月23日未明、ベトナム軍の難民村侵攻によって、タイ軍との激しい戦闘がはじまった。

人々は、安全な場所を求めてただ逃げまどうばかりだった。

(雨季で、小川のようになった森の中に逃げ込む難民たち・6月24日、コクスン村にて)

フォト・ジャーナリスト 野中章弘



Japanese Volunteer Center 機関誌
Trial & Error (試行錯誤) 第4号

毎月15日発行

発行人 税田 芳三

編集人 戸田 耐子

表・裏紙写真 野中 章弘

表紙デザイン 桜井 光二

印刷所 ゆたかプリント

発行所 J.V.C東京連絡事務所

151 東京都渋谷区代々木神園町3-1

OMYC内 JYVA 気付 6号棟1階

最寄駅：小田急線，参宮橋駅下車

TEL 03-460-3994

月・木・土 5~10

定価 1部300円